

大谷學報 第二十一卷 第一號

西山國師の阿彌陀佛觀

安井 廣 度

一

1

彌陀の身土を報身報土とするは、善導に始まるのであつて、大師は『觀經玄義分』の第六門に之を論成してゐる。この下の解説を見ると、國師は先づ佛の三身を説明して、法身は理なれば別の相なく報身の智に依つて顯れ、化身は機に隨ふ所の身であつて報身の智から現れる。即ち、上の理を顯はし、下の機に應ふ身は唯報身であるから、三身の體は唯報身なりとし、又、この中、法身は平等の理なれば能化所化の差別なく、たゞ顯と不顯の不同のみであるから、我々凡夫は之を顯はさんと志すがよく、佛は衆生を度さんと思惟し給ふばかりであるとし、結局、能化の身は報化の二身のみとしてゐる。次に、彌陀の報化に就て、自力聖道門は機より法を判ずるから、地上の菩薩は彌陀の報身を見、地前の者は彌陀の化身を拜むといふ風に説くのであるが、今はそうした通三身門の報化ではなく、別願酬報の別報身

であつて化身には通せずとし、善導が引用する證文の中、第一の『大乘同性經』の文を以て、諸經共通の立場から彌陀が報身たる旨を示すものとし、第二の『無量壽經』の文を以て、正しく別報身の意を明にするものとし、第三の『觀經』上輩の文を以て、報化相對して唯報非化の義を證するものとしてゐる（以上『自筆鈔』の意）。

然るに、國師は我が親鸞聖人のやうに、別報身の意義を直に如來の本願とその成就の一々に就て窺ふことなく、先づ『觀經』の第七華座觀に於て韋提が見佛得忍した所の住立空中の佛體にその意味を見出し、第八像觀の法界身や第九眞身觀の佛身等を以て、第七所現の佛を釋尊の説に移したるものとし、そこから如來の願意を討ねたのであつて、親鸞教學との食ひ違ひはこゝから生ずるのである。蓋し、彼は『觀經』を以て第十七の諸佛咨嗟の願意を開說せるものとし、所謂「行門・觀門・弘願門」の三門を以て、或は「顯行・示觀」「正因・正行」の二門を以て淨土教の根本規範とし、一般には『觀經』所說の觀門から弘願に歸するものとしたから、勢ひかうした説明を成すに至つたもの歟。

二

さて、國師の阿彌陀佛觀は如何といふに、韋提の見佛得忍を見ると、韋提は住空中中の佛體に除「苦惱」法を領解して得忍してゐるから、正覺の佛體こそ衆生をして淨土へ進趣せしめる所の往生の行（行を進趣の義）と致さなければならぬ。是れ國師の所謂「佛體即行說」であつて、その事は乃至十念の釋に能く顯れてゐる。云く。

乃至十念とは、乃至は來迎を指す也、念佛に留るは乃至に非ず、念佛より來迎に至るを乃至と言ふ。何を以て知るとならば、十念といふて佛と云はざるは、此名に第十九の來迎の佛體を具して十念佛と云ふの意也（要釋、II. 298）。

鎮西は本願の乃至十念を稱名に限つて、ひたすらに三心具足の稱名行を往因に供へ、眞宗は稱名往生に即して名號得生を説くのであるが、國師からすると、それは稱に滞り、體に達せざるものであつて、稱から名へ、名から體へと反省し、佛體を以て衆生往生の行となすべしとするのである。依て、本願の乃至十念や、それに依る所の元祖の念佛爲本は、「來迎の果の佛體を衆生の三業の因行に攝めたるもの」とし、第十九願の來迎を以て往生行の本質としたのである。

されど、國師の所謂佛體（正覺の覺體）は、佛の三身四智十力四無畏といった理想的方面よりも、夫等の徳を内容として顯現する所の救濟者を意味するのであつて、國師は『觀經』第九觀の意に依り、好んで「攝取不捨の佛體」といふ語を用ひたのである。從て韋提の見佛も、佛身に即して以て無緣慈攝諸衆生の佛心を見たのであつて、「攝取不捨の見」ならざるものは、見て見ざるものと評してゐる。「聞見一同」の義もこゝで述べてゐる。斯くて、國師は善導が『往生禮讚』に、『小經』の名義釋と『觀經』第九觀の念佛攝取の文とを會合して、彌陀經及觀經云、彼佛光明無量照十方國無所障碍唯觀念佛衆生攝取不捨故名阿彌陀云々といへる釋に注意し、特に無碍光即攝取不捨を以て別報身の義を強調したのである。云々。

無量壽佛を見れば、弘願の體は念佛衆生攝取不捨と知る故に、凡夫の往生疑ふべからず。華座を説きて佛身を説き顯はすと、三尊を見て往生決定と知ると、義齊しくして異ることなし。故に佛當爲汝の聲に應じて三尊現じたまふに、韋提無生を得て、未來の爲に、我が如きの益を得せしめんと請すれば、佛は念佛衆生攝取不捨と説きたまふ也

（定自、II. 352）

顯行の面は、眞を顯はすための假と云ふを以て、眞に居しぬれば、此の假全く要に非ずと云ふ意あるべし。示觀開悟の道理に落居する上には、假よりも眞よりも弘願の一行を顯はす、是れ即ち三心領解の位に入りぬれば、全く眞假の不同なし。設ひ眞佛を見ると雖も、念佛衆生攝取不捨の佛なりと見されば佛を見るとはいふべからず。設ひ假の佛なりと雖も、此の道理に居しぬれば、此に往生を得る故に、此を今見佛といふ也(玄他、IV. 267)。

平等の大悲とは、今の慈悲は大悲に極りて永く機の功を捨て、佛獨り照益す。諸教の慈悲は加すべきに而かも加するが故に無縁の慈悲に非ず。今は佛の大悲に依る照知無碍也(秘決、I. 22)。

三身門の佛光には礙あるが故に、機を選んで之を照す。彌陀の光は智慧缺けて唯慈悲なるが故に無碍光也。十二光の中に此光を以て總體と爲す也(曼註、II. 86)。

無碍とは障なしと讀むべし、所謂正因の佛體也。凡夫を迎へたまふ時、衆生の煩惱無量なりと雖も、佛願力の故に諸煩惱に碍へられず往生を得る謂れを成じたまへる故に無碍神通力と云ふ也(玄他、IV. 265)。

無碍光の利益、特に歸命すべし。故に、天親菩薩の往生論の初にも、先づ世尊我一心歸命盡十方無碍光如來與佛教相應と置きて、讚嘆門に備へたまへり。誠に彌陀の功德を稱せること、殊に無碍光に究むべきもの也(禮自、III. 442)。與佛教相應とは、釋尊說教の本意、此の無碍光に歸して攝取不捨の益を得せしむるに在りと結釋する也(禮自、III. 472)。

この中、初の二文は佛身を以て攝取不捨の覺體とし、從て、見佛といふは斯意を體認することに外ならぬ旨を明にし、第三文以下は無碍光を以て攝取不捨の益を詳にしてゐる。此點、親鸞聖人が十二光の中特に難思無碍の二光を喜

び、九字十字の尊號を崇め、攝取不捨の現益を語り給ふと酷似するが、之を名に於てせず體に於てする所に、猶可なり
のひらきが見出される。

二

更に之を詳にすると、國師は佛に先づ顯行の佛と示觀の佛とを分ち、自力行門の人の解する佛を顯行の佛、他力觀門の人の解する佛を示觀の佛とし、その示觀の佛に正因門の佛と正行門の佛とを分つのである。正因門の佛とは、前來述べた所の攝取不捨の佛體であつて、歸佛の一念に往生の正因を満足せしめられるから、之は念佛行者の信に直接する佛である。而してこの正因門の佛を説明するに、國師は種々な様式を用ひてゐる。云く。

凡そ今の法界身の佛體は、造惡の衆生を體に得て成じたまへる佛なるが故に、造惡の機なくては今の佛體顯はるべからず(玄他、1V. 327)。

法界身とは、法界衆生の歸命の心を體に得て成じたまふ功德也(定他、V. 86)。

此は法界衆生の想心を體となす故に、至心信樂すれば佛心又此の衆生の想心に遍す。至心信樂の心を體に得て成じたまへる佛心なれば、心遍すれば身も遍す、身は心に隨ふ故にといふ意也(定他、V. 87)。

正因弘願の滅罪は機に罪を残すことあるべからず、本願所成の體とは、本是れ惡世の凡夫の稱念の一聲、是れ則ち華座得成の意密、住立空中三尊の所發也(定他、V. 111)。

問曰、無量壽の三字を所詮とすれば必ず歸命覺の三字を具足する意云何。答曰、歸命とは衆生の能歸の一心也、是

れ即ち本願の至心信樂欲生我國を云ふ心也。此心發りて乃至十念すれば、必ず生すべき謂れ極りて成ずる所の正覺の佛體なるが故に、念佛即往生、往生即佛體也、是を念佛三昧の佛體と云ふ也。無量壽を所詮と爲れば自然に歸命覺の三字を具足する也。歸命は心也、覺は佛體也、歸命の心を離れて佛體成ぜざる也、佛體を離れて衆生能歸の心發らざるの故也（玄他、IV. 288）。

問曰、第七所現の佛に付て觀佛念佛の位を分別すること云何。答曰、第七所現の佛は別願所成酬因の身也。而るに本願に觀佛念佛の二つの謂れあり。所謂至心信樂欲生我國等とは、衆生の歸命の心也、是れ即ち三心也、此の三心を發して生ずと示すは、生すべき謂れを成じたまふことを觀佛と名く。乃至十念とは名號也、歸命の心發れば、此の歸命の上に名を唱へて生すべき謂れを乃至十念とは云ふ也、此謂れを成じたまへる佛を念佛三昧の佛と名くる也。至心信樂欲生我國なくば乃至十念の念も發るべからず、乃至十念の念を離れて欲生我國の願も成すべからず、此の二つの謂れを具足して、必ず觀佛念佛の其の謂れ具足したまふ也。故に心に約し機に約して觀佛と名け、行に約し佛に約しては念佛と名くる也（玄他、IV. 296）。

此の佛に觀佛の位あり、至心信樂欲生我國の三心の體を得て成じたまへる功德をば觀佛と云ひ、入一切衆生心想中と云ふ佛是れ也、此は心の位の佛也、仍て是心作佛是心是佛と云ふ者なり。乃至十念の念を體に得て成じたまへる位の念佛の佛と云ふは、念佛衆生攝取不捨と云ふ佛是れ也、此は念佛の位の佛也。第七所現の佛を見る時、此の二つの謂れある故に此の三昧を成ずる形は見物の謂也（玄他、IV. 298）。

別願所成の佛體は、衆生の往生を體とす、此佛の依正二報定散萬行の功德を説き顯す經なるが故に往生淨土爲體と

釋したまふ也（同上）。

斯等の文を熟視すると、國師が『觀經』の第七所現の佛を本とし、之を第八第九の佛に移し、更に『觀經玄義分』の宗旨門を參考して、如來の王本願を窺へることを知るべく、之を文のまゝに見ると、示觀正因の佛といふは（一）十方衆生特に造惡の衆生を體に得て成じ給へる佛であり、又（二）三心を體に得、（四）十念を體に得、（五）三心十念を體に得（六）衆生の往生を體に得て成じ給へる佛なることが知られるのであつて、之を約すると、三心十念の衆生の往生を體に得て成じたまへる佛なることが知られ、又、この佛を三心の方から觀佛三昧の佛と名けて、之に第八觀の入一切衆生心想中の益を配し、十念の方から念佛三昧の佛と名けて、之に第九觀の念佛衆生攝取不捨の益を配し、以て往生の義を明にせるものと解されるのである。まことに能く整備してゐる。以下少しくその意味を尋ねると。

四

從來、多くの者は國師の阿彌陀佛觀を解するに、（一）と（六）に依て、彌陀は十方衆生の往生を體に得て若不生者不取正覺と誓ひ、その願成就して佛と成られたのであるから、彌陀が正覺を成じた時に十方の衆生は往生し終つたのだと解し、從て、佛に歸命するといふは正覺の一念に還るのであると、かういはれて來てゐる。此説は殆んど國師の時代から流行せるものゝ如く、眞宗の學者亦概ね西山の安心をそう解するのである。成程、國師には法體を募る説明が多く、又、往生正覺俱時成就といふ語も少し出てゐるから、左様に解し得る餘地は充分にあるのである。しかし、右の引文に徴すると、それは行き過ぎの感なきを得ないのであつて、斯く衆生の往生を正覺の一念におくから、現實と

調和せんがために種々な苦しい會通を試みねばならぬのである。されど右の引文に依ると、國師は衆生の往生を體に得てとはいふものゝ、それは三心十念せん衆生の往生を體に得て成ずるといふ意味であつて、斯くて願文とも能く相應し、國師の意も能く窺はれるのである。國師の著述を見ると、「機」といふ文字と「三心の機」といふ文字とが奔放自在に使用されてゐるのであつて、例へば「定散・念佛・來迎」といふ特殊名目の定散を解するに、或時は單に之を機とし、或時は之を三心の機とするのである。打ち見たる所この二つは決して同一の語ではないのであるが、宗教的には、機は三心の機となつて、機の意義を成するのであるから、斯く奔放自在にこの兩語を使用したものと思はれる。依て、國師は時に衆生を解して、「往生を願はざれば衆生と名くべからず、念佛を稱へざれば衆生と名くべからず、故に、衆生といふは念佛する名也（密要決、三〇）と申されてゐる。かうした所に國師の内面的な思想家らしい性格が閃めく。されば、衆生の往生を體に得てといふは、所詮、三心十念せん衆生の往生を體に得て成ずるといふ意味であつて、この事は、『觀經定善義』の「意赴有緣時臨法界」の釋にも能く顯れてゐる。云く。

意赴有緣時臨法界とは、無方の化用平等なれども、其化用の本意を尋ねば有緣を思はへたり。有緣無量なれば法界に臨む義成ずる也、然らば意とは本意也、謂く、彌陀利生の本意と云ふ也。有緣とは言通じて意別也、謂く、詞は廣く一切有緣の機に通ずるに似たれども、意は別して念佛の行者を指す、彌陀壇上緣の攝する處、偏に濁世末代の凡夫に在り、末代の凡夫は念佛の心より入る、此を離れて有緣あるべからず、故に有緣の詞を以て念佛の行者に赴くを今の意と爲すべし。臨法界とは、諸佛の法界の機に臨みて利益したまふこと、有緣念佛の行者を攝するより顯はるといふ也。廣く法界に臨むといはゞ、還りて一人も其の凡夫の得益あり難し、法界に臨む義成すべからず。別

して念佛の有縁を攝すれば、一切の衆生此れより出離すべし、故に、有縁に赴くは法界に臨むなりといふ、其意見るべし（定自、III. 268）。

かやうに一切の機を有縁の機に限定するは、宗教的に見て、一切の機を三心の機とするに外なく、又、斯く三心の機の往生を誓ふ所に、廣く一切の機の往生を誓ふ意味ありとするのである。

五

然らば、三心せん衆生の往生を體に得て成じ給へる觀佛三昧の佛と、十念せん衆生の往生を體に得て成じ給へる念佛三昧の佛とは如何、又、その差別は那邊に在りやといふに、國師の解釋は例の如く奔放自在であつて、容易にその眞意が捉へ難いのであるが、「觀佛は必ず念佛を顯はすが故に、觀佛の來迎とは即ち念佛の來迎なり、二佛の來迎とは意得べからず、但し、觀佛念佛其體不離にして二德を顯はす」（玄他、IV. 298）と釋してゐるから、觀佛三昧の佛の外に念佛三昧の佛があるといふのではなく、それは唯だ位の不同であつて、前者は三心を發して生すべき謂れを成じ給へる佛の功德を顯はし、後者は三心の上に名を唱へて生すべき謂れを成じ給へる佛の功德を顯はすもの、如く窺はれるのである（前引の文參照）。然らば、三心と十念とは如何に關係するかといふと、三心は示觀領解の心であつて、之に依て來迎の佛體を領解し、それに歸命する、歸命すれば名體不二の故に必ず佛の名を稱へ、又三業で佛を念するのである。されば、兩者の關係は一往眞宗でいふが如き心火行煙の關係と見てよい。然るに、國師に於ては稱名とあつても鎮西のやうに能稱に滯るを自力とするから、その意味に於て稱即名であり、然かも又直に名を體にかへすから、

前述の如く乃至十念は乃至十念佛となつて、名號得生即佛體即行と解されるのである。そこで、この意味からすると、三心觀佛と十念々佛とは、前は心に約し機に約し、後は行に約し佛に約し、又、『觀經』の施設を以てすれば、能詮所詮の關係とも見られるのである。但し三心と十念とは義の始終であつて、時間の前後と見てはならないやうである。されば、三心十念の衆生の往生を體に得て成じ給へる佛といふは、三心に依て十念の佛體に歸し、三業に念佛せん衆生を必ず往生せしめんといふ別願酬報の佛と解すべきであらう。但し宗旨門の釋に依ると、觀佛や念佛は宗であつて、宗の趣く所、即ち體(體を宗趣の義に解する)からすると、「一向佛體に約して往生の道理を顯はす」のであるから、我々が往生を得るのは、三心十念ではなく、來迎の佛體のためなりと知られるのである。

猶、三心の方へ像觀の「諸佛(彌陀)如來是法界身入一切衆生心想中」の益を配し、十念の方へ眞身觀の念佛衆生攝取不捨の益を配してゐるのは、兩者に義の前後があるから、暫らく三心に就て入我を説き、十念に就て我入(攝取不捨)を説いたのであつて、入我也我入も畢竟一箇の救濟(即便往生)事實を内外の兩面から説明したものに外ならぬのである。

要之、阿彌陀如來はもと衆生の往生のために起ち上らせられた。而して、佛自ら衆生往生の行たらんと志し、萬劫修功を積んで、三心十念の衆生に入り、能く之を攝取して即便往生せしめ給ふ、そういふ正覺を成じ給ふたのであつて、斯く南無の衆生を體に得て成じ給へる阿彌陀佛であるから、國師は南無阿彌陀佛の六字を以て佛の名とし給ふたのである。

前述の如く、南無の心を體に得て成じ給へる佛といふは、南無せん衆生の往生を體に得て成じ給へる佛といふ意味であつて、その故に、彌陀の正覺に依て、南無の機は必得往生せしめられるのである。一毫の煩惱を斷せず、一善一行を修せずとも、彌陀に歸すれば即便往生するのである。されど、造惡の機の往生を體に得て成じ給へる佛が、常に造惡の衆生を憐愍し給ふが如く、南無の機の往生を體に得て成じ給へる佛が、常に衆生をして南無せしめるやうに、三心成就の意圖に燃え給ひしことが偲ばるべく、國師が佛の御名を鎮西のやうに阿彌陀佛の四字とせず、眞宗のやうに南無阿彌陀佛の六字とせられたのは、こゝまでの意味があつたものと推察されるのである。従て、「至心信樂の心を離れて佛體成じたまはず」(定他、*イ・ニ*)とか、「歸命の心を離れて無量壽の體なし」(玄他、*IV・三〇*)とかいはれてゐるのは、三心の機の往生を離れて佛體成ぜず、佛體成ぜば三心の機は必ず往生するといふ以上に、三心の機を離れて佛體成ぜず、佛體の成ずるときに三心の機があらはれると、そこまで不可分の關係を認むべきではなからうか。即ち、衆生からいへば、衆生は佛の正覺を見て三心を發し、佛からいへば、佛は衆生が三心を發した時に正覺を成じ給へるが如く、而して、三心の機は即便往生の機であるから、佛の正覺と三心の機の往生とは俱時成就と解せられるやうである。即ち、從來いふが如く、國師の考は正覺の一念に十方の衆生が凡て俱時に往生したといふのではなく、十方衆生の中に「宿習開發」するものがあつて、そうした三心の機が正覺と俱時に往生したといふのではあるまいか。或は三心の機が顯れた時を正覺とし、之を十劫成道と説いたのであると、かう解すべきではなからうか。斯くして已今當の

往生は盛んである。國師はかう述べてゐる。

釋迦は能く淨土の法を説きて凡夫を度したまふ、觀門是れ也。又彌陀は能く説かれて來迎したまふ、弘願是れ也。故に此法説かるれば凡夫必ず攝せらる、攝せらるゝ道理顯はるゝ故に必ず歸命すべし、故に歸命卽南無也と云ふ意を釋し出だす也。是れ則ち此法の必ず機あることを顯はす。隨機の法は機を待ちて益を得、其機不定也。今の法は眞實の法なれば、一切の凡夫に蒙らしめて説く、此法あれば時として機なきこと莫しと也。此機は別の故を備へて機と爲さず、説かるゝ法を聞きて信する即ち機なり。信すれば南無する故に、無量壽の下に必ず南無はある也。取り出せば、先づ南無せらるゝ故に南無を加ふる也（玄旨、III. 37）。

十方衆生とは彼の佛の名號の中に攝在す、即ち南無の二字是れ也。此の南無を無量壽と開いて南無阿彌陀佛と成就したまふ、而かも是れ即ち凡夫の口稱と成りて、正覺を我等が往生と俱時に成じたまふ故也（散他、V. 150）。

この中、前の文は、法のある時は必ず三心の機の在るべきことを示したのであつて、佛の満足大悲（南無阿彌陀佛の法）を信受し、聞已往生を説く國師として、此の解は充分に首肯されるのである。又、後の文は五趣の往生を論成する下に出てゐるので、その意は、佛の正覺と同時に三心の機があつて往生し、爾來念佛往生が盛んであるから、五趣の者でも宿習開發せば往生に漏るゝことなしとする意であらう、即ち、十劫正覺の初を先例として五趣の往生を論成したものと解されるのである。

更に之を所謂十劫久遠の論に關係せしめて見ると、國師は十劫の彌陀に就て次のやうに述べられてゐる。云く。
問云。大經彌陀經には彌陀正覺の時節を説けり、今經に説かざるは何の意あり哉。答曰。大經彌陀經には修得法身といふことを顯はして十劫正覺と説くと雖も、未だ定善示觀の謂れを顯はさず、故に佛を求むる所の心に於て、心に佛を作れば心は佛の謂れを顯はす。然れば、今經には衆生の至心信樂の心即ち佛の正覺の體也と云ふことを顯はして、別に正覺の時を説かざる也。佛の正覺は衆生の往生也、衆生の往生は正覺の體なりと云ふことを顯はす也。故に、彼此三業不相捨離の文意、尤も分明也（定他、V. 82）。

彌陀の覺成を論ずるに二あり、一に十劫は是れ慈悲也、始覺なり、指方立相して從是西方と説き、十劫と明して凡夫の往生を成就せしむ。二は本覺の佛、是れ智慧の覺體也、已成窮理聖真有遍空威と云ふ、或は三世の諸佛彌陀よりして正覺を成じ、或は過去現在未來諸佛淨業正因と説く。惣じて一切の諸佛に此の始覺本覺の二あり、是れ則ち慈悲智慧也、彌陀の慈悲智慧の覺を以て諸佛と爲すが故に、智慧は性空なる故に無始無終と云ふ、法華の本門即ち彌陀の智慧也、故に念佛の名なるを以て無始無終と云ひ、今は慈悲を明すが故に十劫正覺と云ふ也（密要、II. 275）。

問曰。經に西方四十二恒河沙土を過ぎて無勝の淨土ありと云ふ云々、是は十萬億、彼は四十二恒河沙也、都て此の如き説、經々の所明、諸佛の淨土一に非ず、此等如何會すべき乎。答曰。此等は誰も知らず見ず、但し此等は一宗を立つる前に、皆隨機のために説を異にする也。其の言説に依り其の言に留まる者、豈一宗を立てん哉。佛の員數を作り義を造る事は、智慧の法門なるが故に、是を隨機の説教と云ふ。今彌陀に於て十萬億と云ひ、十劫正覺と云ひ、乃至十念と云ふ、若し十に留りて十劫正覺と云ふは、三世の諸佛彌陀に從りて正覺を成ずと説き、又、已成窮理

聖眞成遍空威在西時現小但是暫隨機と釋する故に、十は數の圓滿の義也、十に極むべからざる也。是故に四十二恒河沙等は皆是れ東岸の説教也、兩岸に至らざる也。故に、觀經自開の前には十劫正覺を説かず、十萬億土と明さず。而して其の經々の説は假説の故也、偏に唯一乘法と云へば二法あるべからず。譬へば、夜星月其の數ありと雖、天に日の光明出づるに、皆月星形を失ふが如し。是も又此の如し、觀經已前には機に隨ひて無盡の説を設くと雖、觀經自開の前には皆接して衆譬に納むるが故に、九方を嫌ひて繫念一處と明す也（秘決、I 439）。

問云。彌陀の正覺より十劫以後なり、世自在王佛の所に於て正覺を成じたまふ、豈十劫已前の諸佛、未成の佛に依りて正覺を求めん耶。答云。十は圓滿の義也、以て十に限るべからず。諸佛の智慧正覺ある也、以無緣慈攝諸衆生の義なし。簡機を以て佛となさず、無緣の慈を以て佛とす、假令十劫已前の諸佛正覺を成ずと雖、其義相違せず。譬へば、日出づれば月星皆日に攝せらるゝが如し。月星を以て諸佛の智慧とし、日出を以て超世の慈悲とす。又、彌陀を以て諸佛の法王として皆此願（第廿二願）に寄する也（要釋、II 303）。

此等の文意を一つ／＼解説することは省略して、今必要な點丈を述べておくと、この中、第一文は三經の説を比較して、大小二經に正覺の時節（十劫）を説くは、彌陀が修得の報身たる旨を顯はし、『觀經』にその時節を説かないのは、約していへば往生正覺一體の佛たる旨を示さんが爲なりとするのである。その意は、法身は無始無終にして捉へ難きより、大小二經は時間空間の範疇にはまつた報身を説いたのであつて、十劫の彌陀に依つて我々凡夫は佛の人格性を知るのである。しかし、既に佛の人格性が知られた上は、特別に時節の沙汰するには及ばないのであつて、『觀經』はその人格性を説明して、往生正覺一體の佛たる所以を明にせんとするから、時節の問題には觸れなかつたと

いふのである。往生正覺一體の佛といふは、前述の如く彌陀は三心せん衆生の往生を體に得て成じたまへる南無阿彌陀佛であるから、他力自然に南無せしめられ、又、南無の一念に攝取せられ往生の益を得るのであつて、この場合、南無阿彌陀佛は我々三心の體であり、攝取往生の體であり。又彌陀正覺の體でもあるといふのである。依て、國師は「正覺は佛に約し、往生は機に約す、是れ機の往生は即ち佛の正覺なり、佛酬因の因は即ち衆生往生の因なり、此を他力と名く」(玄他、IV. 38)と釋し、又、「南無阿彌陀、ほとけの御名と思ひしに、稱ふる人のすがたなりけり」と歌つたので、之を往生正覺一體の佛と名けるのである。但し、國師は親鸞聖人のやうに他力廻向を談ぜざるがため、這邊の機微を詳にすることなく、それは結局に於て生願佛行説となるのであるが、實際の感味は聖人と甚だ近きを覺ゆるのである。次に第二文は、彌陀の覺成に始覺と本覺のあることを述べたもので、十劫の彌陀を以て始覺、慈悲、指方相とするは、前文の意味を詳にするものである。但し、本覺に關する説明は、『觀經疏大意』の説に合はざるものゝ如く、別にいはんとする所があつたのであらう歟。——勿論、國師以後に於ては、かうした説も用ひられてゐる——。

次に第三第四の兩文は、十劫の十を滿數の義に解して、彌陀を滿足大悲の佛とし、「簡機を以て佛とせず」諸佛も結局に於て彌陀に救はるゝものとなすのである。この中、第三文に「觀經自開の前には十劫正覺を説かず」といへるは注意すべき文句であつて、此を第一文に會合すると、その滿足大悲といふは、往生正覺一體の佛たる點に在ることを知らしめられるのである。而して、既に十を滿數の義に解する以上は、十劫の時節に煩はされる必要はなく、この修徳の報身を以て、そのまゝ進んで無始古成の佛とし、又退いて現在新成の佛とは見られないであらうか。國師が「法藏菩薩のみ行門成じて佛となりたまふ」(玄自、III. 6)といはれたのは、結局、彌陀を以て無始古成の佛とするものゝ如

く、又、我々は歸佛の一念に、彌陀の正覺を正覺として領解し、彌陀自らも衆生の發三心に正覺を實感し給ふであらうから、こゝに現在新成の佛ありともいはれやう。國師の文章は奔放自在であつて、その意味の明らかならぬものが少くないが、かうした氣持を以て國師の著述を讀むと、そうした意味にも接するのである。内面的な思想家である國師はこゝまで味つてゐられたのではなからうか。

以上、示觀正因の佛に就て、第一に攝取不捨の別報身たる旨を述べ、第二に三心十念の機を攝取往生せしめん佛たる旨を述べ、第三に往生正覺俱時成就の意を考へ、第四に往生正覺一體の佛たる旨に觸れ、延いて無始古成の義に及んだのである。

八

猶、國師は彌陀の淨土を以て「獨勝の土」とせず、之を「願土」とし、「依正具足」の義を強調し、從て「眞假一體」「通別一體」の義に及び、「四十八願とは凡夫往生の謂れ也、仍て寶樹も攝取不捨を顯はし、寶池にも攝取不捨を顯す此の謂れ法界身の佛と差別なし、此の謂れにて四十八願所成の依報は即ち正報の謂れ也」(玄他、IV. 29)と深い所をつき、事相の鈔に至ると、汎神論者とおもはれる迄に、汎く森羅萬象に來迎の相を拜んでゐるので、詩情頗る豊かなるものがある。一二の文を引いておく。

曼陀羅の一にする意は、一切草木萬物悉く六十萬億の佛身となして念佛衆生攝取不捨の利益あることを顯はさんため也(曼法、II. 27)。

一切萬法唯名體の二を具足す、其の名は念佛に窮り、其の體は來迎に極まりて、此れより外になしと見る故に、目前の境と十方無盡の萬象と其體替ることなき也、是れ皆往生の衆譬を作るなり。此外に亦二三なきが故に唯有一乘法と明し、萬法を念佛來迎の名體に極めて往生を教めと知る、是を佛の利益と爲し是を慈悲の利益と爲す、是れ果の利益也（要釋、II. 293）。

事相の鈔には、到る所にかうした文字を見るのであるが、此等は國師の豊かな法味を洩したものかと思ふ。

九

終りに正行門の佛に就て少し述べておくと。歸佛の一念に正因満足して即便往生する者は、更に正行の増進につとめ、以て當得往生を期するのであつて、國師はかういつてゐる。

一廻向とは、三業所修の善根無量也、各菩提に至るまで衆生を利する功德あり。然るに、凡夫自力の行業は一々に成じ難ければ、菩提に廻向すれども言のみ有りて實なく、利生たりと雖も名のみにして其益なし。故に今自力の廻向を息めて、一切の功德善根は只彌陀如來所有の功德也、一善として備らずといふことなく、一法として空しきことなし、一代の教に説かるゝ所の八萬四千の波羅密は、皆彌陀の功德を開きて凡夫に懸かること有りとならざるに有りけり、我れと修し成すべき故なしと意得て、一向に阿彌陀佛に諸の功德を廻し入れて、利生の悲願を憑む心を發して、其の上に、彌陀を憑む心深く成りぬれば、彌陀所有の功德を學び顯はすこと、淨土に生れて爲すべきことをかつかく穢土にても習ひ修めて、惡をば退き善には進む心を遣りて、一善をも修し一惡をも止めて淨土に生れ

むと廻向する。即ち廻向を一に成すにて有る也（定自、III. 208）。

一には顯行の觀佛。是れ則ち自力の心を以て佛の内證外用の功德を觀する是れ也。二には正因の觀佛。別願所成の佛也、十六觀に亘りて第九門の境と顯れて念佛を顯はす佛也。三には正行の觀佛。定散の中には定善あり、十三觀の中には第九に限りて餘觀に亘らざる佛也。此れは正因の道理に落居しぬる上、反りて佛の内證外用の功德を觀する也（玄他、IV. 296）。

顯行と正行とは行體同じきが故に同する心も之あるべき也（定他、V. 90）。

この中、第一文は先づ諸の功德を彌陀に廻し入れて攝取不捨の悲願を憑めよと、正因門をすゝめ、次に、往因満足の上は、「彌陀所有の功德を學び顯はすこと、淨土に生れて爲すべきことを且々穢土にても習ひ修め」よと、正行門をすゝめたのであり、第二文は觀佛三昧に就て、顯行のそれは、自力の計ひを以て佛の内證外用の功德を觀じ、正行門のそれは、他力の心地から之を觀するとし、第三文は從て、顯行と正行とは行體を等しくするが意は別なりといはんとしてゐる。されば、之を平たくいふと、自力顯行の者は、佛を（阿彌陀佛でも）我等の理想として之を學ばんとし、他力示觀の者は理想佛でありつゝ、然かも直接には救濟佛として示現する攝取不捨の佛體に往路を見出し（正因門）、しかも、佛の大悲に陶醉することなく、あらたに他力の心地から、救濟佛に即する理想佛を仰ぎつゝ之を學んで行くので（正行門）。かやうに正因正行の兩面を適當に見て正行増進する者は、報土の中でも上品に生るとするのである。

以上、國師の阿彌陀佛觀の中、最も宗教的な本質的な部分を述べたのであるが、轉じて、阿彌陀佛と諸佛の關係をたづね、之と佛性の關係に及ぶと可なり難解になるのである。此等の問題に就ては、何れあらためて補遺したいと念じてゐる。

昭和一四、一二、一七了